

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：11301  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19K00490  
研究課題名（和文）多言語性の否定と肯定 ルーマニア・ドイツ語文学に見る言語アイデンティティの諸相  
  
研究課題名（英文）Denial and Affirmation of Multilingualism: Aspects of Language Identity in Romanian Germanlanguage-Literature  
  
研究代表者  
藤田 恭子 (Fujita, Kyoko)  
  
東北大学・国際文化研究科・教授  
  
研究者番号：80241561  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、第一次世界大戦後にルーマニアのマイノリティとなったユダヤ系およびドイツ系ドイツ語詩人や作家が自らの多言語性に対して示した相反する姿勢に着目し、多言語性が彼らの文学の形成に果たした役割を考察した。研究代表者と研究分担者が携わってきた研究テーマに基づき、藤田がブコヴィナ、鈴木がトランシルヴァニアを担当したが、相互に情報交換し、総合的に議論を行った。ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちにおける「カノン」としてのゲーテ尊崇の一方で、イディッシュ語詩人イツイク・マンゲルとの交友があったこと、トランシルヴァニアにおけるシラーとルターを中核とする民族意識形成の諸相などが明らかになった。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、第一次世界大戦後にルーマニアのマイノリティとなったユダヤ系およびドイツ系ドイツ語詩人や作家が自らの背負う多言語性に対して示した一見相反する姿勢に着目し、多言語性が彼らの文学の形成に果たした役割を考察した。第二次世界大戦後のユダヤ系住民の離散、東西冷戦による西側との遮断、そして東欧革命後のドイツ系コミュニティ崩壊により、戦間期および戦後の資料の多くが歴史に埋没していたが、本研究は、それらを掘り起こすことで、戦間期から戦後にかけてのユダヤ系ドイツ語詩人とイディッシュ語詩人の交流やトランシルヴァニアにおいてマイノリティとなったドイツ系住民の民族意識の諸相を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： This study focused on the conflicting attitudes that Jewish and German poets and writers, who wrote their works in German language as mother tongue but became minorities in Romania after World War I, showed toward their own multilingual environment, and examined the role that multilingualism played in the formation of their literature. The principal investigator worked on Bukovina and her research partner on Transylvania, respectively, but exchanged information and engaged in comprehensive discussions with each other.

The study revealed that Jewish poets in Bukovina revered J.W. Goethe as a "canon", while at the same time they were friends with the Yiddish poet Itzik Manger, as well as various aspects of the formation of national consciousness in Transylvania, focusing on the role of the reception of Friedrich Schiller and Martin Luther at the core of their activities against the weakening of German residents.

研究分野：ドイツ語圏文化・文学

キーワード：マイノリティ ブコヴィナ トランシルヴァニア イディッシュ ナチズム

## 1. 研究開始当初の背景

ルーマニアのユダヤ系およびドイツ系ドイツ語詩人たちはルーマニアのマイノリティであり、また地理的な事情に加え、第二次世界大戦後の東西冷戦により、西側ドイツ語圏が彼らのに関する情報を得ることは難しかった。さらに、ルーマニアのドイツ系住民が第二次世界大戦中にナチズムを受容した過去や彼らを束ねるうえで大きな役割を果たしたドイツ民族主義を背景に、西側ドイツ語文化圏からもルーマニアからも周縁化されることで受容が遅れ、広範な学術的議論が始まったのは、1987年以降である。トランシルヴァニアのドイツ系ドイツ語作家に関する研究は長年にわたり同郷人会に担われていたため、ドイツ民族文化を肯定的に強調する姿勢が前面に立ち、学術的等閑視につながっていた。同郷人会から距離をとり、批判的学術研究として展開したのは2000年代以降である。

ユダヤ系詩人は第二次世界大戦中のホロコーストにより離散したが、1989年の東欧革命以後、多くの詩人の作品がドイツで順次刊行された。ルーマニア国立文学博物館に詩人アルフレート・マルグル=シュペルバーの遺品として保存されている同郷ユダヤ系ドイツ語詩人たちとの書簡類が整理され公刊されつつある。しかしイディッシュ語詩人との交流については、1932年にイツィク・マンゲルの詩集のドイツ語訳が出版された事実に触れるのみで、マルグル=シュペルバーがどのような意図からイディッシュ語とドイツ語の橋渡しを試みたのか等も含め、経緯については詳らかでなかった。

本研究の研究代表者は、これまで、マルグル=シュペルバーやアルフレート・キットナー等のユダヤ系ドイツ語詩人たちが、国民文学としての「ドイツ文学」からの排除に抗するべく、前衛的な詩の表現や意義を深く理解しつつも敢えて、ゲーテを中心とするドイツ文学の伝統的で彼らにとって正統と思われる表現法を採用し、ドイツ文学の担い手としての自らの「正統性」を強調したことを明らかにした。しかしユダヤ系ドイツ語詩人たちはイディッシュ語詩人と袂を分かったわけではないため、その交流についての研究の必要性を認識した。

他方、トランシルヴァニアのドイツ系ドイツ語文学については、同郷人会から距離をとったことで現在、最大のタブーであった同地でのナチズム受容に関する歴史学からのアプローチがなされている。しかしナチズム受容の素地となった、文化的アイデンティティ構築という視点から、多言語的環境におかれたドイツ文化・文学観を批判的に捉え、その多様性を把握する試みはなされていなかった。また同地では東欧革命後も優れたドイツ語文学を生み出しており、エギナルト・シュラットナーの自伝的長編小説『首なし雄鶏 *Der geköpfte Hahn*』(1998)のように、ナチズム受容以前の多言語多民族が並存する社会を肯定的に捉え、複数の言語が入り乱れる優れた作品も生まれている。

本研究は、上記のような状況を踏まえて、構想されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦後にルーマニアのマイノリティとなったユダヤ系およびドイツ系ドイツ語詩人や作家が、自らの背負った多言語性から一方で距離を取りつつ他方でこの多言語性を引き受けようとする姿勢に着目し、多言語性をめぐる振幅が彼らの文学に果たした役割を分析する。それにより、ルーマニア・ドイツ語文学の新たな評価の可能性を見出すことが目的であった。

ルーマニア・ドイツ語文学がドイツ語圏諸国で本格的に学術的議論の対象となったのは1989年の東欧革命以後であり、その場合もマイノリティ特有の社会的政治的事情に根差した文学の特徴を十全に評価しうるとはいえず、この文学への評価が国民文学観を踏まえた文学史観の枠から解放されることは極めて難しかった。マイノリティの視座から従来の文学評価に新たな照射をも行うことで、文学研究およびマイノリティ研究双方に寄与可能な学際研究である。本研究を通じて、書籍化やデジタル化されていない重要な資料の発掘と部分的な公刊も目的の一端とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、ルーマニア・ドイツ語文学が歴史的に背負わざるをえなかった多言語性に着目し、地域毎に異なる社会的事情のなかで、詩人や作家がどのように複雑な言語アイデンティティを形成し、それが作品にどのように反映されており、それらがどのような学術的評価を可能にするのかを解明した。

研究代表者(藤田)と研究分担者(鈴木)が従来携わってきた研究テーマとの親近性に基づき、藤田はブコヴィナ、鈴木はトランシルヴァニアを担当したが、それぞれの地域に関わる研究成果

を相互に情報交換し、総合的に議論を行った。議論のとりまとめは研究代表者である藤田が担当した。

研究は以下の手順に従って進めた。

(1) ブコヴィナについて

マルグル=シュペルバーを中心に展開した両次大戦間期のブコヴィナのユダヤ系ドイツ語文学を理解するためマルグル=シュペルバーが主筆を務めた『チェルノヴィッツ朝刊』紙芸欄の記事等を収集し、書誌情報や内容等を整理する。

マルグル=シュペルバーやキットナー、ローゼ・アウスレンダー等ユダヤ系詩人の書簡集等からイディッシュ語やイディッシュ語詩人に関わる資料を発掘し、確認する。

上記の詩人たちの作品におけるイディッシュ語やイディッシュ語文学との距離あるいは親近性を確認する。

(2) トランシルヴァニアについて

両次大戦間期ならびに第二次世界大戦以降のトランシルヴァニアの言語状況を確認し、ドイツ系住民とルーマニアやハンガリー、ユダヤ系(イディッシュ語話者などを含む)などの各(言語)集団との関係を、当時の同地のドイツ語新聞や公刊されている書簡集などを踏まえて確認する。

上記の資料を分析し、多言語状況におけるドイツ語話者としての文化的アイデンティティの諸相を剔抉し、整理する。

トランシルヴァニア在住の作家エギナルト・シュラットナーの諸作品における多言語性の表象を整理し、その特徴を捉える。

(3) 総合的議論について

ブコヴィナおよびトランシルヴァニアのドイツ語話者のアイデンティティをめぐる言説を比較し、その共通性と相違性を確認する。その際、両地域のドイツ語話者と施政者(ウィーン、ブダペスト、ブカレスト各政府)との関係を歴史学の研究成果等を踏まえて整理し、彼らの言説の背景を理解する。

両地域の詩人・作家のドイツでの受容における共通点と相違点を確認し、マイノリティ文学としてルーマニア・ドイツ語文学の特徴と評価の関係を議論する。

#### 4. 研究成果

2019年度、藤田は、ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちのメンターとされるアルフレート・マルグル=シュペルバーについて、両次大戦間期の詩作と活動を中心に論考「『周縁』と『カノン』 - ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとゲーテ」をまとめた。前年に開催されたシンポジウム『東欧文学の多言語的トポス』での発表内容を、本研究の視点を踏まえてさらに発展させた論である。多民族多言語が共存する地域でユダヤ系ドイツ語話者が抑圧されていく現状への文学的抵抗について、テキスト分析し、彼らの「カノン」として意識されたゲーテへの視線に重心を置いて考察した。末尾でマルグル=シュペルバーたちとイディッシュ語文学との関係について示唆をしており、本研究の前提を明確にした。

鈴木は19世紀後半以降のトランシルヴァニアでドイツ系住民が、ルーマニアやハンガリーなどの各集団との関係を意識しつつ団結を強めていくなかで、ドイツ古典主義の詩人フリードリヒ・シラーを崇敬していく経緯を、生誕や没後の記念祭に着目して明らかにした。それらの催しを報じた当時の新聞記事などを収集して分析し、そのような文学的かつ文化的土壌がナチズム受容で果たした役割について整理し、論考「戦間期と『国家社会主義者』シラー - トランシルヴァニアのシラー祭 - 」として発表した。

2020年度はコロナ禍により、国外での調査が不可能となり、そのため古書の入手と、公開されているデジタル資料収集の試みなどに重点を置いたが、資料の公開状況は他分野に比して遅れ気味であるため、可能な範囲での資料整理を心がげざるを得なかった。

藤田は、ブコヴィナ出身の詩人マルグル=シュペルバーやキットナー等と同地出身のマンゲル等のイディッシュ語詩人との関係について資料を整理した。また東欧のドイツ語文学全般についての記事を依頼され、『ドイツ文化事典』への寄稿を行い、東京大学ドイツ=ヨーロッパ研究センターで開催された同書の刊行記念シンポジウムでも、コメンテーターとして、多言語が併存する東ヨーロッパの状況を踏まえ、国境を超越した視点からの「ドイツ語文学」さらには「ドイツ文化」の理解について発表を行った。鈴木は前年度の論考で扱った時代の後、すなわち第二次世界大戦末期から戦後の社会主義独裁体制下、さらに1989年の体制転換後までのトランシルヴァニアでのシラー受容の状況を解明し、論考「シラーを祭り上げた『民族』のその後 - トランシルヴァニアのシラー祭 III - 」として発表した。

2021年度もコロナ禍により日本国外での調査ができず、前年同様の資料収集を行った。

藤田は、マルグル=シュペルバーや詩人アルフレート・キットナー等と同地出身の著名なイディッシュ語詩人イツイク・マンゲルとの関係について資料を整理・分析した。特に、1920年代にマルグル=シュペルバーが新聞の芸欄に寄稿した記事に着目し、詳細に検討した。その成果の一端は、日本独文会における口頭発表「ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学 - 言語と文学における『ユダヤ性』へのアンビバレンツ」およびその内容を敷衍した同題名の論文として公表した。付随して、キットナーが第二次世界大戦後のルーマニアで発表していたマンゲルの回想記の全文を翻訳し、解説を添えて「あるイディッシュ語詩

人の肖像 アルフレート・キットナー『詩人イツイク・マンゲルの思い出』』として公開した。鈴木は2019-2020年度にトランシルヴァニアにおけるドイツ古典主義の詩人フリードリヒ・シラーの受容について19世紀から現代にいたるまでを解明してきたが、さらに関連資料を収集した。同時に、鈴木と藤田は同地出身のドイツ系作家エギナルト・シュラットナーの作品の分析にも着手した。

2020年度、2021年度は海外調査ができなかったため本研究の期間を1年延長した。2022年秋に海外への渡航の制限がなくなったため、2023年3月にオーストリア国立図書館で資料調査を行ない、トランシルヴァニアやブコヴィナで刊行された新聞や文化雑誌などの記事を収集できた。

藤田は、引き続きマルグル=シュペルバーやキットナー等と同地出身のイディッシュ語詩人マンゲルとの関係について資料を収集して整理し、東欧におけるドイツ語文学に関する、より広い視野を得つつある。鈴木は、ルター派が大きな力を持っていたトランシルヴァニアのドイツ系住民コミュニティにおいて、ナチズム受容と並行し、ドイツ古典主義の詩人フリードリヒ・シラーが「国家社会主義者」として歪曲されるに至った経緯を啓明したが、それを踏まえてさらに、トランシルヴァニアにおけるルターとシラーの関係に関する言説を分析し、論文「ズィーベンビュルゲンにおけるルターとシラー」にまとめた。

藤田と鈴木は現在、第二次世界大戦期のトランシルヴァニアを描いたシュラットナーの自伝的長編小説『首なし雄鶏』の翻訳を進めている。研究発表のために不可欠の作業であるが、長編かつ背景に複数の民族の文化的遺産が重なっているため、もうしばらく時間が必要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 藤田恭子	4. 巻 29
2. 論文標題 ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学 言語と文学における『ユダヤ性』へのアンビバレンツ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田恭子	4. 巻 16
2. 論文標題 あるイディッシュ語詩人の肖像 アルフレート・キットナー「詩人イツィク・マンゲルの思い出」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヨーロッパ研究	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木道男	4. 巻 27
2. 論文標題 戦間期と「国家社会主義者」シラー - トランシルヴァニアのシラー祭 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木道男	4. 巻 27
2. 論文標題 シラーを祭り上げた「民族」のその後 トランシルヴァニアのシラー祭III	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木道男	4. 巻 30
2. 論文標題 ズィーベンピュルゲンにおけるルターとシラー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤田恭子
2. 発表標題 ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学 - 言語と文学における「ユダヤ性」へのアンビバレンツ
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 石田勇治 (編集代表)、佐藤公紀、柳原伸洋、宮崎麻子、木村洋平(以上、編集)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 ドイツ文化事典(分担記事; 東欧のドイツ語文学)	

1. 著者名 井上暁子、三谷研爾、阿部賢一、藤田恭子、越野剛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 256
3. 書名 東欧文学の多言語的トポス (分担部分; 「周縁」と「カノン」 - ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとゲーテ)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学  
[https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=137300&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=46](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=137300&item_no=1&page_id=33&block_id=46)  
 あるイディッシュ語詩人の肖像 アルフレート・キットナー「詩人イツィク・マンゲルの思い出」  
[https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=137282&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=46](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=137282&item_no=1&page_id=33&block_id=46)  
 戦間期と「国家社会主義者」シラー - トランシルヴァニアのシラー祭 -  
[https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=129984&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=38](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=129984&item_no=1&page_id=33&block_id=38)  
 シラーを祭り上げた「民族」のその後 トランシルヴァニアのシラー祭III  
[https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=133657&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=38](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=133657&item_no=1&page_id=33&block_id=38)  
 ズィーベンピュルゲンにおけるルターとシラー  
[https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=139724&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=46](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=139724&item_no=1&page_id=33&block_id=46)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 道男  (Suzuki Michio)  (20187769)	東北大学・国際文化研究科・教授    (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関